

自 選 五 十 首

大松達知

Tatsuharu Omatsu



〔おおまつ・たつはる〕一九七〇年東京都文京区白山生れ。芝中学・高校在学中に作歌を開始。上智大学外国語学部卒。九〇年「コスモス」入会（現在、編集委員・選者）、翌年「棧橋」参加。千葉ロッテマリーンズを愛する。都内私立中学高校（男子校）に勤務。

かへりみちひとりラーメン食ふことをたのしみとして君とわかれき 「フリカティブ」(二〇〇〇年)

妻の傘にわが傘ふれて干されゐる春の夜をひとりひとりねむり

早朝に散歩す南海の楽園といふ喩にだまされて

a pen が the pen になる瞬間に愛が生まれる さういふことさ

のちの世に手触れてもどりくるごとくターンせりプールの日影のあたり

ヒヤシンス春のぬくとき部屋にゐてくるしむごとく速育ちせり

へい山田へわるい山田と呼びわかる二組・五組のふたりの山田

しらす干しの中に大きなしらすゐて思ひ出す巨軀の生徒のひとり

もやもやの生徒ひとりがやつて来てもやもやの樹となりて立ちをり

ジョン・ポールと呼ばば親しもヴァチカンを治める白衣白帽の人

予備校のポスターに〈本土国立大学進学〉とあり沖縄一九九七年

チエア・パースン・ポリスオフィサー・ファイアファイター・パースンホール・アンパンパースン

はじめの日左右なかりスリッパに左右あらはるその〈時〉の嵩

「alone はやびしき」ことを含意せず」わからねば臍のごとく眠れよ

収入のため異国語の摩擦音^{フリカケイブ}ひびかせてゐるわれのくちびる

〈中学で習ふ単語〉の医者^{ドクター}あり電車^{モーター}運転手^{マン}なし塵埃^{ダスト}収集人^{マン}なし

めちやくちやを止せば老人になりさうでときに食ふ夜半のどんこつラーメン「スクールナイト」(二〇〇五年)

あなたには(くつしたなどの干し方に)愛が足らぬと妻はときに言ふ

成績を上げます。がんばります。と書く賀状さみしも名を見ればなほ

生徒ひとり平手打ちする夢のなかわれは真紅の袴を穿いて

正解は〈定規〉のところ〈ものさし〉と書きたる生徒わきて愛^{うら}はし

死の直前とはいつからか 前の夜はぬくもりありき祖父の手の甲

日本鬼子^{リーベンケイグ}とささやかれつつこの村を過ぎたる中に柎二ありけん

流るるにつれて汾河のみどり濃し南稻北麦^{たんなうほくばく}その間を往けり

アメリカに移り住むといふ選択肢^{ほし}まだあり青春の余白にも似て

仏像^{ぼつぞう}と仏のちがひほど大きジョージブッシュとユナイテッドステイツ

車中にて親指メールする人よ人を思ふとき人はうつくし

わたつみへ帰^{かへ}りてゆける道すがらワインとなりてわれに寄る水

あちさるを〈水の器^{ハイドレイシヤ}〉と呼ぶこころ 西洋人^{あみたち}かなりやるぢやあないか

悩みごとありやと妻が問ひきたり柎二をわれの読めるこの夜

つれづれに読む広辞苑〈原子力発電〉のつぎに〈原始林〉あり

あからひくアレッサンドロ・デルピエロ十字を切りてフィールドに入る

小学校のときには塾の講師に憧れた。中学・高校に進むにつれて語学への興味が高まった。大学は外国語学部英語学科。入学とほぼ同時に「コスモス」に入会。歌を好きになる前に外国語が好きになり、教員になる前に歌を始めたというややこしい時系列になっている。

歌集を読み返すと、いかに外国語の単語が多いかに驚く。英語だけでなく、旅行先の現地語を取り入れた歌も多い。それは良く言えばハイブリッド、悪く言えば雑種ということになる。

職業は〈英語〉の教員。ただし、意識としては〈外国語〉の教員である。英語が支配的な世の中だが、本来はどの言語も平等に価値があるはず。英語に偏^{へん}つてはいけないんだという気持ちはある。ただし、英語は大雑把にいうと、フランス語とドイツ語の合成言語だから(日本語が漢語と和語の二重言語であるように)語彙数的に多彩で、文法的にも複雑でおもしろいことは確か。

しばしば、英語のセンチがなぜ(日本の古典形式の)短歌をやっているのかを尋ねられる。答えは簡単。

玉砕だあ 叫ぶ声ありはつなつの考査終はりしざわめきのなか『アスタリスク』(二〇〇九年)

教室でケイタイが鳴つてゐるけれど開戦を告げる合図にあらず

しばしばを背比べしに来しひとりもう来ずわれを抜きさりてのち

よく笑ふ親の子供はよく笑ふ なんでもなくてしあはせなこと

テクノロジーに背を向けてゐるこちよさ白墨もつて教室へゆく

狂ほしいほどにアジアよ 村田森田安田山田が出席簿につづく

誤植あり。中野駅徒歩十二年。それでいいかもしれないけれど

弁当に梅干入れて昆布入れて、そんな私が英語を講ず

アドレスの Kim-tae-hyung はおそらくは本名ならん金原君の

騎馬戦に勝てばまとまるクラスなり国威発揚のごとき明るさ

わが足の裏を揉みつつ妻言へり 授業のない日は足が柔らかい

〈ドイツ人対ポーランド人〉と言ひ換えてみればおそろしサッカーなれど

みづからの息子に〈絵〉と名づけたる男とこれから面談をする

なにゆゑかひとり池を五周する人あり算数の入試問題に

むらさきの房を垂らして文鎮は決してペーパーウイトでない

手をつなぐためにたがひに半歩ほど離れたりけりけふの夫婦は

東京にうまれて生きて訛りなし訛りなければ母語なきごとし

満員のスタジアムにてわれは思ふ三万といふ自殺者の数

言葉そのものに興味があるからだ。大きな思想の裏打ちがあったり、ブ

ンガクを目指して歌を始めたたりした

わけではない。長い文章で論理を構築するのは苦手だけれど、言葉を手

掛かりにして断片的に面白いことを考

えつくほうが得意。そういう私を短歌形式は受け容れてくれた。

三冊の歌集を読み直してみると、

そういうさまざまな自分の特性が直

截的に反映されているように思う。

短歌がなければ汲み上げられなかつ

た自分と言う井戸水。いや、短歌のお

おかげで採し当てられた自分の中の

金鉱と言つてもいい。

暗黒の思ひの淵のこの体いかなる

歌が出てくるか知らず

という歌がある。

このあとも、まさに自分ではわか

らない暗黒からどんな歌が出てくる

のか、楽しみながら苦しみたいと思